

忘
田
解
心

知
家
集
六

松田解小豆笈集

まつ とき こ
松田 解子

1905年、秋田県荒川鉾山（現在の協和町）に生まれる。小学校卒業とともに鉾山に働き、のち秋田女子師範二部に入学、卒業後鉾山の小学校に勤務。1926年春上京。女工などを経て労働運動に近づき、1928年「産む」で読売新聞新人短篇募集に入選。『無産者新聞』『戦旗』への投稿をつうじてプロレタリア作家同盟に参加する。『ナップ』『プロレタリア文学』『女人芸術』その他に執筆。敗戦後、民主化闘争と文学活動を再開。『おりん口伝』で第一回多喜二・百合子賞、第八回田村俊子賞を受賞。他に『おりん母子伝』『桃割れのタイピスト』『地底の人々』『あなたの中のさくらたち』『回想の森』『またあらぬ日々』（新日本出版社）、『松田解子全詩集』（未来社）、『生きることと文学と』『松田解子・斎藤公子対談——愛と変革の保育思想』（創風社）などがある。現在日本民主主義文学同盟員、日本文芸家協会員。

松田解子短篇集

定価はカバーに表示

1989年9月15日 第1版第1刷印刷

1989年10月1日 第1版第1刷発行 ©

著 者 松 田 解 子

発 行 者 千 田 颯 史

発行所 株式会社 創風社 〒113 東京都文京区本郷 4-17-9-601
電話 (03) 818-4161 振替東京2-129648

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

印刷・製本 KMS

ISBN4-915659-25-9

目次

逃げた娘	3
産む	13
乳を売る	17
風呂場事件	47
行く者帰る者	99
重役は言ったが	119
卵	123
勘定日	130
白と黒	134

ある戦線	147
飯場で	170
そだち	212
大鋸 <small>おが</small> 屑 <small>くず</small>	242
行進凶	257
小枝と鉄蔵	283
朝の霧	294
伊沢先生	325
あとがき	348

松田解子短篇集

逃げた娘

美恵子はうつくしく、貧しい娘だ。父は二十年来の坑夫、母は泥背負（どろせじよい）、そして十七の春を迎えたばかりの彼女は、坑内の手子（てご）として働かねばならなかった。

岩窟は限りなく鉱脈を孕んで黙々と眠っている。その中で、血の枯れた心臓と、くさりかけた銅肺を、蒼白い皮膚に包んで、力なく岩壁にタガネをうちこみ、崩れる岩をささえ、どんな残忍も不合理も、ここでは永久に埋もれ果てるであろう現実の奈落に生きるこれら一群の人々の中に、新しい犠牲として、彼女は迎えられたのだ。

「なあ……今度十二番坑に来た娘、バカに綺麗じゃねえか」

戸沢が、ヨロケた肺を埃っぽい空気に弾ませながらいった。

「なんだか、こう……熟した果物みたいだなあ」

「うん、いい女さ、だがたいがい知れてらあ、今に見ろ、彼奴も、主任の色狂い奴にすっかりなぶられ

てしまうから」

横川がダイナマイトを岩壁に挿し込みながら冷たく答えた。岩の窪みに吊し上げた二つのガスカンテラが細長い藍色の焰を動かして、二人の蒼白い顔を死人のように照し出し、無気味な影を岩壁に描いた。遠くでケーシ（豎坑昇降機）がけたたましく警鈴を鳴らしながら捲き降されるような気配がした。

「早くしろよ、女が主任の供物ってこたあ昔から×沢坑内のおきまりじゃないか。それより、こんな暗し、までくたばりたくねえもんだ」

戸沢が苦しそうに咳こみながら、一人言のように云った。

「うん、大丈夫だろうな、あの十三番坑の角を曲るまで？」

横田が、ガスカンテラを、もう一つ上の窪みに吊し替えてから導火線に火を点じた。

「六分はかかるぜ！ 早く」

やがて、二人の影は、本能的な敏捷さで、遠くへ消えてしまった。

地下の秘密を物語る赤い爬虫類のように、導火線は静かに、しかし、性急に燃えはじめた。つぎの瞬間、際涯知れぬ大岩窟が、あたかも自らの深い苦悶を振り落とそうとでもするように、物凄いい唸りをあげて揺れ、ゆれた。巨大な洞窟が、累々と鉦石を崩しながらそこに横たわった。血線のように生々しい鉦線をふくんだ銅鉦の無数の塊りが、暗闇の中に山吹色に輝き渡った。……そして、一切の音響が地を払ったかのごとく、深い静寂がしんとあらゆる空間に押し広がった。

二人の仲間が、まだ姿を見せない。

美恵子はカンテラを下げて、十二番坑道にそって鋏車を押した。と、暗闇の彼方に一つの灯が見えた。

——誰だろう？——彼女は一種の恐怖に似た好奇心から、濃い暗黒をかきわけて、じっと、灯の持主に眼をそそいだ。——Sだ！——彼女は思わず身をふるわせた。

坑内の人間にしては珍しい肥満した身体と脂ぎった赤ら顔を、ときどきカンテラで光らせながら、まっすぐ近づいて来るのだ。

「ちっとは慣れたかい？」

彼は、美恵子にすれすれに近づいて云った。かくし切れない肉の衝動が、声の中にうごめいた。

「はい、ちっとは」

美恵子は鋏車のふちを固く握りしめたまま、頭を下げた。

「まあ少し休むがいい。よく働くね」

と云いながら、彼はその、ブツテリふくれた両手を、美恵子の肩にのせた。彼女は肩を撃たれでもしたように驚いて、頭を上げた。

「ちょっと見張まで来てくれないか。たのみたい用事があるんだが」

「はい」

なんとという悪魔！しかし、彼女はそう答えねばならなかった。もしここに、太陽が輝いて居ったなら、

一人でも仲間が居ったなら、彼女は彼の醜い面相に唾をかけて背を向けることができただであらう。襟元から爪先まで、さっと冷水を浴びせられたような恐怖の予感を、まざまざと意識しながらも、この際、彼女は黙って彼の後に従わねばならなかった。

光の破片さえ、人間の咳一つ、そこには無かった。突如Sは立ちどまって後をふりかえった。その眼は肉に飢えた野獣の眼であった。たくましい双腕が敏捷に躍って、うちふるえる少女を力限りかき抱いてしまった。美恵子は声量と力のすべてを搾って暴れ叫んだ。けれど遠くで、ハッパ（ダイナマイトの爆音）が、雷のように呻いただけで、人の声はなかった。

「殺すぞ、黙れ！」

彼はその厚く、大きな唇を彼女の顔に突き出しながら脅した。

「声を出すな！」

彼は再び叫んだ。が、彼女の救いをもとめる叫びは止まなかった。ポンプのもてあました地下水が、二人の足下でピシャピシャと鳴った。醜くも二つの肉体が、もつれ合ってそこに横たわった。しかし必死の号叫と、野獣の罵声は絡み合って岩壁へ響きわたった。憤怒に狂ったSは、とうとう身もがいている美恵子を踏みつけて起きあがった。

「畜生！ 強情者！」

その憎しみのためにふるえる声。しかし蒼ざめた少女は黙ったまま、呪いにみちた瞳で男を見かえした。「生意気奴、お前の親爺を見ろ！ すっかりヨロケて半分以上棺桶に入っているんだが、可哀相だと思

って、首をつないでやっとなるに、おぼえていろ！」

彼は、ガスカンテラを持ち上げて彼女目がけて投げつけた。けれどそれは空しく岩壁にはねかえって砕け散り、カーバイトの塊が、地下水の中でシュッシュッと苦しげな声を立てた。

「誰にも言っちゃいかんぞ、から意気地のない雌犬奴！ 失せやがれ！」

彼はあたかもその激しい憎悪の毒素を吐きちらすように叫びつづけてすたと見張のほうに歩き出した。美恵子は、海綿のように濡れ疲れた、身体を、岩にもたせてようやく起きあがった。あまりに恐ろしい侮辱を思つて、いまさらのように涙が溢れた。……畜生！ 忘れるものか！……暗の中から、衰い果てた父母の姿が、幽霊のように浮びあがつて、胸が苦しくなるのを感じた。なんとという人殺し！ いっそ皆にアバいてやれ！ だが、それが何になるだろう？ もう一度、心ゆくまで泣きたいような気がしたが、涙が、仕事にたいする責任感のようなものでせき止められたかのように、乾いてしまった。

十二番坑にさしかかった時、さっと背後から藍色の光が流れて来て、足元で揺らめいた。

「もう一分のところまでくたばりそこねた」

その案外不平らしい調子は、戸沢の声にちがいがなかった。

「あれで主任の奴、しばらくはいい面を見せやがるぜ。素晴らしい富^な鉢^おさ、あたったからなあ」

横田の声である。

美恵子は小走りに走って鉱車につかまっていたが、もう一步前には二人の仲間が立ちほだかっていた。

「美恵子ちゃ、どうした？ そんなに着物を汚して」

「あの……主任が……」

と、云い淀んだかの女は、急に、何もかも堪えられないというように声を出して泣きはじめた。

「わかった！ 氣狂い奴！ 俺がいつか、明るい所であいつの面き泥塗ってやるから」

戸沢は自分の娘でも辱かしめられたように憤慨して、骨張った頬をふくらませ、凄い眼付きで、見張のほうを睨みかえした。

ジャラン………ン………と、葬式の鐘のように、交代時間の合図が、坑道から豎坑へ、豎坑から坑道へ、倦怠の尾を曳きずって鳴り響いた。坑夫や手子を乗せたケーシが、氣狂いじみた速さで捲き揚げられ、捲き降ろされた。氣まぐれな、だが、晴れ晴れしい歌声が、血の氣の失せた坑夫たちの唇を突いて、狭い坑道の両側に反響した。

娑婆の地獄で働く俺等

主任が鬼なら俺等は死人

掘ってもぶつても出てくる宝

ただの一度も身にやつかぬ

「うまい、うまい、なかなか！」

誰かが大声で唸った。

女房可愛けやそれやなおのこと

死んでおれよかヨロケた身体

ヨロケ、枯竹、子ばかり出来る。

ガチャンとブリキ板にタガネを投げつける音につづいて、頓狂な笑い声がドツと起った。

「しっ！」

「来たかい？」

「どこにけつかるかわかるもんか、用心しろよ」

で、急に皆が黙りこんでしまった。ぞろぞろと濡れた地下足袋でレールを踏みつける音と、無気力な呼吸や、咳だけが、あとからあとからつづいてくる。美恵子は、その列の最後にくつついて、この上もなく呪われた自分を意識しながら、白い坑口を目当てに進んだ。

十燭のカーボン電球が、淡紅色の呼吸を吐いている。Sはさも岩窟の王らしく、その下の大きなテープルに向って腰をかけ、ヒョロヒョロの老坑夫を前に立たせて、冷然と紙巻を喫している。

「で、お前は何と思うんだ、娘の事を。それで、お前のクビの問題はどうにでもなるさ、なにしろ、銅価は下る、それにこじゃ月一トン方産出銅が減ってるんだからなあ、要らない人間は、キルよりほか、道のない現状なんだ」

老坑夫——美恵子の父は、世の中の、言葉のすべてを忘れてしまったかのように咽喉をつまらせて、ガ

ツクリ頭を垂れたまま動かない。Sの口から輪になって飛び出した紫の煙が、老人の白髪頭にぶつかっては、ゆらゆらと岩張りの天井に消えていく。

「どうぞ……」

彼はようやく、名案が胸に浮んだらしく首をもたげた。

「どうぞ、今一度、娘と相談させていただきとう存じますが」

「じゃあ、なるべく早く早くするんだぞ。もう申請の期限が迫っていることだしするから」

Sは、もう老人の存在など忘れたように、くるりと後向きになってドアを開いた。……どうしてそんなことができるだ？ たった一人の、娘を……老人は、彼の背中に、ていねいに頭をさげてから、音をたてない深い溜息を吐いた。

「美恵子ちゃんが死んだとよ、十二番坑の堅坑から、自分で落ちて行ったとよ」

「嘘？」

「誰、そんなこと嘘いうもんだ？ 面白くもねい」

「何で死んだ？」

「主任さんにほれこまれて、それを苦にして死んだとよ」

「何て、足りないこと、やらかしたんべ、立身だと思わねいでほんとに」

「ほんとになあ」

砂滓山の上に満月が冴えて、乳色に立ちこめた亜硫酸ガスの細い生肌を突き破って、坑夫長屋や、電柱や、橋のたもとや、うねうねと連る出羽山脈のてっぺんに、さんさんと銀のしぶきをふりかけている。手子の秋ぼうが、横田の姉と直利橋の欄干にもたれて、湯帰りの、短い裾を、川風になびかせながら、真実らしく語り合った。

「生きておればこそ、湯にも入られる、お盆も来るというのに、ほんとになんて馬鹿だろうな」

横田の姉が、さもあきらめられぬというように、付け加えた。

西側の配電所から、九時の気笛が猛獣のように欠伸して、またぐったり眠りこけてしまった。ドドッ……ドッとタンパン水が岸を打って砕けては、銀色の鱗を持った蛇のように西へ西へと流れて行く。

朝だ。

だが、地平線下千数百尺の坑である。戸沢は、一握の赤い紙片を、暗黒の中から、手という手に差ししべた。

君たちは命がけで働いていながら、豚の糞よりひどい南京米をあてがわれている。

君達のクビは、いつまでもつながれているだろうか。

君達の姉や娘がS主任に弄ばれはしなかったか。

君達は、会社が銅価下落と産出銅の低下を理由として、今、大鉦を磨いていることを知ってるか！

手を握れ。眼をさませ!

力だ。団結の、組織の、力だ。

力で闘え!

御用組合××会を粉碎して、

真実の、俺達の、組合に入れ

………

彼らは、カンテラの焰の中から、これらの言葉を読み取った時、急に、肺臓の熱するのを感じた。

「そうだ。俺たちは人が好すぎた」

「誰が、これをよこしたんだ?」

「誰が? 誰だつてかまやしねえ、俺らは半分死にかけてるだ。だが、生きてるだ。しっかりしろ!」

「そうだ」「そうだ」

刹那、力そのもののような彼らのダイナマイトが、どう、爆発せねばならないかを、はっきりと彼らは知った。そして、かつて考えても見なかったほどの、新しい力を全身に感じながら、眼は眼をさがして輝き、手は、手を捜して握りしめた。

それから間もなくである。

県下でも有名な、やっぱりM会社の経営にかかる××鉱山で、美恵子は、日本労働組合××会の組合員として、果敢な闘争の渦中にあるということが、戸沢の口から、ひそかに洩れたのは。